

Question : 防護柵の性能規定が改定されたと聞きますが、景観に及ぼす影響は？

Answer 最近、ガードレールなどの防護柵の色彩が白色から、ダークグレーやダークブラウンなどに変わってきていることに気がついた方も多いかと思います。これは、平成16年の「防護柵設置基準」の改定によって、これまで視線誘導の役割を防護柵に持たせていた規定がなくなり、地域景観に配慮した色彩を採用することが可能となったからです。この改定により、随分と日本の道路景観が良くなりました（全体のレベルはまだまたかとは思いますが）。

これまでガードレールやガードケーブルなどの車両用防護柵は、構造や形態が定められた仕様規定に基づいて製品の供給が行われていました。これは大量の規格品を生産し、さらにメーカー間の部品の互換性などを担保する上では効果的なものでした。しかし、この規定も、平成10年の同基準の改定によって、性能規定に改められました。性能規定とは、防護柵に求められる必要な機能を実験によって確認できれば、防護柵として認められるというものです。たとえば、路側に設置される防護柵では、衝突時の離脱速度や離脱角度、歩道側への車両の進入距離、衝突時の乗車人員に対する加速度などに関する諸条件を実車衝突実験によって確認することが求められています。また、橋梁用の防護柵では、支柱や横梁などの強度について、静的荷重試験によって確認することなどが必要とされています。

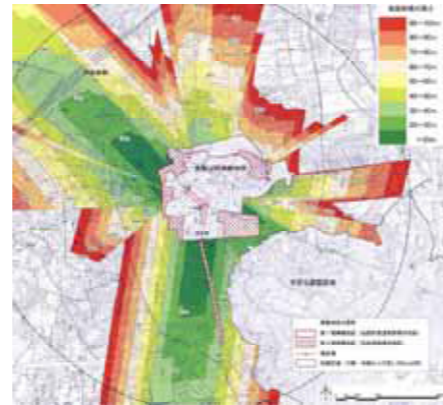
この性能規定への改定は、「景観に配慮した防護柵の整備ガイドライン」（平成16年・国土交通省）によって、はじめて景観的影響力を発揮することとなりました。この一連の動きは、メーカー団体等を動かし、景観に配慮した標準品が開発されるようになりました。これまでも橋梁用では、デザイナーが入った優れたデザインの製品が一品ものとして設置されることはありましたが、このガイドラインによって数多くの景観に配慮した標準型防護柵が供給されることとなりました。

自治体の景観計画などで定められる基準は、直接的に景観をコントロールすることに主眼を置いています。景観を良くするための積極的な基準とはしにくい面もあります。一方、防護柵のような国が定める基準類は、それらの施設がいっぱい存在するがゆえに、身の回りの景観に大きな影響を与えています。このような基準類を精査、改定することで、都市や地域の景観をより良くすることができることに、私たちはもっと目を向けても良いのではないのでしょうか。防護柵の性能規定への改定は、そのような意味で身の回りの景観向上に貢献したといえるでしょう。

事務局だより

8月末で第5期が終了し、この号が発刊される時にはすでに第6期に入っています。事務局としては10月22日(土)の定例総会に向けて決算や予算をはじめとする総会資料の作成に忙しい時期です。さらに、今度の総会では役員改選となるため、新役員選出や、今後の新体制での活動内容の検討など、課題が山積しています。NPOとしての正式発足以来実質4年がたち、ようやく軌道に乗りかけた感もありますが、資金面や人材面の充足がなかなか進まないため、当初目標として掲げたいくつかの事業実施にはまだかなりの時間がかかりそうです。理事会としても侃々諤々の議論を重ねていますが、他の会員の方や、潜在的新規会員の方々の積極的な参加が求められます。特に50代以下の年齢層や女性会員の入会を期待しています。 事務局長／八木 健一

(株)都市環境研究所



眺望を守る仕組みをつくる

上の図は、都市環境研究所が提案し、倉敷市景観計画における眺望保全地区の制度に関連する図です。

<http://www.city.kurashiki.okayama.jp/secure/21620/keikan-keikaku/>、参照

中心部は美観地区ですが、美観地区の9地点から、町並み越しに見える建物の高さの概要を示しています。町並みの背後に見える建物は「眺望斜線を超えることができない」という規制の対象となりますが、地区特性と調和する良質なデザインの建築物に対する例外規定があり、市のデザイン・レビューにより、眺望斜線を超えることも可能です。

(株)都市環境研究所は、都市の個性を守り、活かす景観計画を目指しています。



倉敷河畔の風景

代表取締役 小出和郎
東京都文京区本郷 2-35-10
tel 03-3814-1001
http://www.urdi.co.jp/

編集後記

前回13号の景観コラム「東日本大震災に思う」の編集が大忙しであったこともあって、今回はお休みにしました。景観ビジネス最前線は、ついに代表の会社にまでお願いする羽目になっています。この広告欄を使って計画諸事情のよもやま話を続けてくれそうです。季刊誌のPRになり面白そうですが、今後も図解や写真を使った楽しい記事を期待しています。また、会員諸氏の広告斡旋を期待しています。



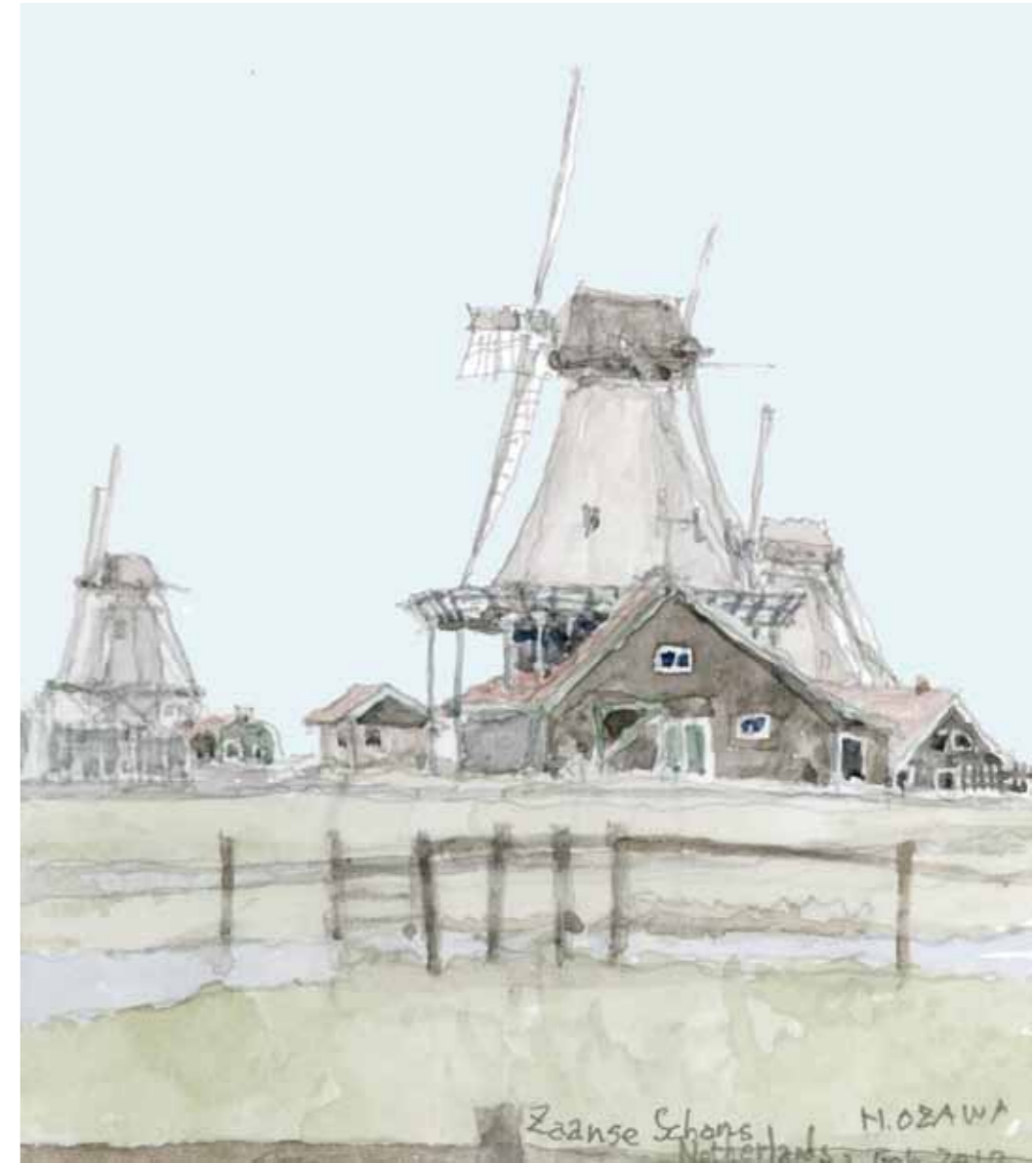
2011-09-01

目次

- 表紙
水と風の知恵ーオランダの風車
(絵・文) / 小澤 尚
- 見開
TDA NEWS
TDA 連続「景観講座」
ー第7回～第9回概要ー
/ 柴田 いずみ・曾根 幸一・栗原 裕
- 見開
海外ランドスケープ事情
「アドリア海の都市」/ 井上 洋司
- 裏表紙
景観文化Q & A
「景観形成エレメント」/ 伊藤 登
- 裏表紙
事務局だより / 八木 健一
- 裏表紙
景観ビジネス最前線
/ (株)都市環境研究所

景観文化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう <http://www.tda-j.or.jp>



水と風の知恵ーオランダの風車

オランダでは、水害に備えるために土手を築き、地面より高い位置の運河などに内側に風力で水を汲み上げて、運輸も支えた水沿いに並ぶ風車が保存されている。先日は、ポロ布などをほぐし紙として再生している現役風車の内部をみせてもらい、絵に使う紙を得た。紙作りは風車の維持の資格を持っている彼が一人で行っていた。内部は、木製の歯車の仕掛けが多様に繋がり、その姿はドキドキさせてくれる。低層の付属屋は、コンサートもできそうな室内で、見たお礼を口実に「この素晴らしい世界」をトランペットで吹き音響を楽しんだ。風車の大きさは思ったよりも大きく、避難もできる腰の丸いバルコニーも10mを超える高さの位置にあるものも多い。円錐台の形状は、水の流に耐え、風車は、動力を供給し強い風を和らげる。水のオランダの知恵はまだある。

「持続する景観」のシリーズは東京の5つの地区から始まったが、地方の活動も知りたいという要請もあって「持続する風景—地方都市「鶴岡」の挑戦」を東北公益文科大学大学院教授の高谷さんと地元で活躍する菅さんにお願した。これを地方版の初回と位置づけ「彦根」「静岡」「松本」と4回の連続講座とし、終回の「松本」は6月18、19日の土日に地元に向って締めくくる企画になった。「鶴岡」の報告は12号で済ませているので、今回の報告は「彦根」「静岡」「松本」である。



松本でのパネルディスカッション

海外ランドスケープ事情



海岸線までの延びたカルスト地形に寄り添うように建築されたドゥブロブニク



複雑な入江の連続するアドリア海の波は静かで、大型船も行交る深度をもつ

7 「彦根」
彦根御城下 町衆力
柴田 いずみ
滋賀県立大学 環境建築デザイン学科教授

関が原の合戦に勝利を得た井伊直政は、石田三成の居城であった左和山城に入城した。その後、彦根城が、井伊家嫡子・直継により彦根山に築城された。徳川は威信をかけて普請奉行を送り、各藩に作業が割り当てられ、大津城、長浜城からの移築も含め建造された。内堀、中堀、外堀と3重の堀と、河川を付け替えられた芹川を含め4重の水路、また松原内湖によって守られた城と城下町は、西の天皇と秀吉側を牽制し、東の徳川を守る城として形成された。

時代は過ぎ、京橋から伸びる商業地は、道路の拡幅と共に、キャッスルロード・夢京橋として平成の木造町家のファサードをもつ街路となった。これらは行政の提案を地元町衆が覆し、自ら景観コードを決めた事例となった。この平成の町家群の裏手には、少なくなったとはいえ、いまだに足軽屋敷や町人の町が残り、それらへ導入路となっている。さらに、花しょうぶ通り(旧名:上恵比須商店街)は、今、もっとも彦根で元気なまちづくりをしている。現在文化庁の重要伝統的建造物群保存地区にむけての調査が終わり、申請準備中である。その最中、2011年1月2日、活動拠点であった「ひこね街の駅・寺子屋石」が火事になり、多くのボランティアの方々と2月5日のCifaさんによる応援ソングのライブ



のおかげで、再興作業順調に進んでいた。そこに3月11日の東日本大震災が起きた。ゆるきやら総出で、チャリティを行い、応援ソングの売り上げは、被災地や避難活動に対して送る事を決めた。これらの事が迅速に決定できたのも日ごろの連携の賜物と思っている。近江八幡や長浜は町衆が強いのに比べ、徳川時代に井伊家が一回の転封もなかった彦根は為政者の力が強かった。しかし、街路事業というハード事業と彦根城築城400年祭というソフト事業を契機に、町衆力が強くなってきたことも特徴である。(松原内湖:第2次大戦中1944年~1945年に干拓)(寺子屋石再興プロジェクト: http://chikaraisi.hanashobu.net/)(ゆるきやら:いしだみつにゃん、しまさこにゃん、おおたににゃんぶ)(前へ前へ:作詞・作曲・歌Cifa)

8 「静岡」
持続する景観はいかにして出来たか
曾根 幸一
TDA 副代表

この講演は私の郷里について生半可に覚えていた街の知識を再整理して自分の育っ

「アドリア海の都市」

初夏に、「魔女の宅急便」のモデルの街と言われるロビーニョや世界遺産ドゥブロブニク等、美しい町が多いと言われるアドリア海を旅した。

クロアチア海域には1,185の島があり、中にはアメリカのホワイトハウスの石を産出した島や、チーズがおいしい島、塩の産地で名高い入江等、多様な特徴を持つ島や入江が点在している。その多様性は、地形にある。街の背後は、広大な石灰岩のカルスト地形が展開し、それが海の浸食により複雑な地形の島々や入江を作り出している。街は、港ごとに様々な船が自由に寄港できる法的な措置のせいか、早朝から観光客船で、賑わいを見せている。街の発展は車がすべてという固定観念がまず崩れる。(歴史的には、沿岸からの様々な街道が、その発展の基盤であったのだが)このことも、街を今でも豊かな、場所に行っている要因だ。同時に海岸線の複雑な地形はそのまま沿岸の多様な都市像を私達に見せてくれる。

アドリア海東海岸線の複雑さは、海運にも好都合であった。特にアフリカ大陸から地中海を越えて吹き荒れる、「シロッコ」に対しては入江のおおい此の海域は好都合であり、それ故様々な文化圏の影響を受けている。なかでも「アドリア海の真珠」と言われた街・ドゥブロブニクは1991年独立戦争の時代、およそ2000発の砲弾の被害に見舞われ、壊滅的な被害を受け、跡形もない状態になったが、およそ15年ではほぼ完全に復元され、再度

た家から建築や街へと虫から鳥の目に至るようにまとめてみたものだ。

家の話はやや私小説風になってしまったが、戦争の疎開で転居した家がタイプの違う家だったから自宅の二戸一や、親の実家の農家、町屋、そして6.25坪の戦災復興住宅まで紹介し、話の最後に東日本震災の復興に結びつけてしまった。工業化された仮設プレハブ住宅ではまた瓦礫をだすことになるが、木造は大工が資材を使い回すから敷地さえあれば瓦礫は出さずに増築でき、やがて街に変貌するはずだ。

建築の話は静岡銀行や市庁舎、公会堂や県庁舎まで手がけた中村と資平の話である。氏は浜松の出身だが、業績を調べていくうちに静岡の諸建築を設計していた傍らで都市デザインの研究もしていたことが解ったのは収穫であった。中村建築が市街地の要の位置にあるから街がコンパクトに感じられるのである。30年代の建築家は実に多彩なデザインを展開している。



料亭・浮月楼を設計した吉田五十八の話もしたがその師の岡田新一郎もその一人だ。彼らを取り巻く粋筋の話も面白い。浮月楼は慶喜さんの別宅であった場所で、戦

TDA 理事 井上 洋司



様々な船が寄港するドゥブロブニク港/沖に数千人を乗せた大型客船が着く



嘗ての島の稜線の上から見下 カルスト台地にへばりつろしたドゥブロブニクの街並 くような沿岸の民家

前は文壇や政治家の利用が多かったというが五十八の新築は僅か2年で焼失している。また、静岡には戦後になって出来た路線建築帯と呼ぶ共同建築が今でも呉服町の目抜き通りに残っている。この建築帯は私自身の修士論文の対象でもあった。間口と奥行きを調べて市街地建築のモデルを探る内容で当時は他愛のないものだと思っていたが、あれから半世紀、今になってみると重大な意味を帯びてくる。建設省の委託も絡んでいて後の都市再開発法とも関連していたのである。竹茗堂の6代目西村重吉翁が今で言う組合をまとめて完成させた話などは今の世代で知る人は少ないかも知れない。実はこの講演1月29日に静岡のある会合に頼まれて喋ったものに若干手を加えて再演している。

9 「松本」
松本の景観文化・地方都市の街づくり再考
栗原 裕
TDA 理事

2011年6月18日(土)、19日(日)にTDAとしては初の1泊『景観講座』を開催しました。今年の景観講座のテーマ「持続する景観」の締めくくりとして、「松本都市デザイン学習会」、「松本市中央公民館市民講座」、「都市環境デザイン会議」、「建築家協会杉並地域会」の共催で多くの方に参加していただきました。

初日はまず、「松本都市デザイン学習会」、「松本市中央公民館市民講座」の方々の案内で数組に分かれ、小雨にも負け



ずに松本市内の「まち歩き」を行いました。

その後、松本市中央公民館において、地元建築家の山田健一郎氏(山田建築設計室)をコーディネーターとし、TDAメンバー、地元メンバをパネラーとして『松本の景観文化—地方都市のまちづくり再考』と題したパネルディスカッションを行い、参加者と活発な意見交換を行いました。

翌日は、都市環境デザイン会議の「松本キャラバン」との共催企画として「バス利用見学会」を行い、松本都市デザイン学習会メンバーの案内で、「まつもと市民芸術館」、「松本市美術館」、「薄川左岸屋敷林」、「旧開智学校」、「松本城」、「窪田空穂記念館」等を見学しました。



世界遺産に登録された経緯をもつ街だ。このようなことができるのは石造建築だからと言えるかもしれないが、ただそれだけではない様な気がする。

この街も嘗て(9世紀頃)は、橋で陸と繋がる島の街であったが、13世紀ごろには現在のように地続きになったと考えられている。その経緯をここで触れる誌面はないが、カルスト大地が浸食された複雑な地形の上に、城壁と建築物が出来上がっている事は、海岸線にすれば一目瞭然である。さらに街を歩けば、きわめて計画的に出来上がっているようなこの街の姿も、実は自然地形に委ねられて出来上がっていることが分かる。街の南は嘗ての島の稜線に向かって、長い石段上に住宅棟が順次立ち並んでいる。13世紀までに作られたと思われる地区には、平行配置の住宅棟が平坦に並んでいる。

この街が、わずかな期間で再構築できたのは、現在の街の形が自然地形と一体できわめて合理的であったばかりでなく、これ以上に創造性にあふれる都市像を現代が作り得なかったからかもしれない。いずれにせよ、複雑な地形故の複雑な文化を持つアドリア海の諸都市は、多様な都市景観が構築されていて、まだまだ多く謎を秘めている。それが、海沿いの都市のあり方の、一つの方向性を見つけ出すケーススタディーになると考える。

ひょっとすると、今回の大震災で被害を受けた海沿いの街の復興に役立つヒントがありやしないかと思い、更なる考察の旅を続けたいと考えている。